

第II章

研修会の成果をさぐる

—アンケート調査を中心に—



1. アンケート調査の概要

第1～7回の研修会最終日には毎年度、研修生からアンケートをとり、研修会への満足度や不満点などを把握してきた。それらの結果を、次年度の研修会カリキュラムやプログラム編成に反映させるためであった。今回の調査は以下のことを調べるために実施した。

- ・ 研修会が行われた期間に現場のニーズに変化はあったのか。
- ・ 研修生のニーズを前提として設定された研修目標は、どの程度達成されたのか。
- ・ 研修生は、研修会に対してどのような総体的な評価をしているか。
- ・ 研修生は、研修会で得たことを研修会後に生かしているか。

さらに、この調査から収集された研修生の生の声を踏まえて、教師研修のあり方について改めて考えたい。

(1) 調査の実施概要

調査期間：2003年8～12月

調査対象：中国中高校日本語教師研修会(1996～2002年)に参加した研修生523名のうち、連絡先が確認できる者

調査方法：郵送による調査票(130～133頁参照)の配付と回収

調査票数：447

回収数：302

調査票の送付数および回収数

	参加者数	送付数	回収数
普通中学教師	465	397	274
外国語学校教師	18	12	8
小学校教師	11	11	7
教研員	29	27	13
合計	523	447	302

(2) 有効回答の回収率

回収した全回答(302)のうち、外国語学校教師(8)、小学校教師(7)、教研員(13)の計28を除いた274を有効回答とした。これは、研修会の対象が普通中学の教師であったことから、より正確な調査結果を得るためである。

さらに、開催年別と教師歴別集計では、重複参加者による回答14を除いた260を有効回答とした。これは、重複参加の場合、どの年度の研修会についての回答なのかが明確でないためである。

有効回答の回収率は次頁のとおりである。なお、教師歴の年数は、研修会参加時のものである。

①全体集計の有効回答(274)

	送付数	回収数	回収率(%)
内蒙古自治区	41	29	70.7
吉林省	123	83	67.5
黒龍江省	104	57	54.8
遼寧省	128	104	81.3
山東省	1	1	100.0
合計	397	274	69.0

②開催年別集計の有効回答(260)

	送付数	回収数	回収率(%)
1996	15	9	60.0
1997	31	25	80.6
1998	24	11	45.8
1999	70	49	70.0
2000	86	60	69.8
2001	86	58	67.4
2002	68	48	70.6
合計	380	260	68.4

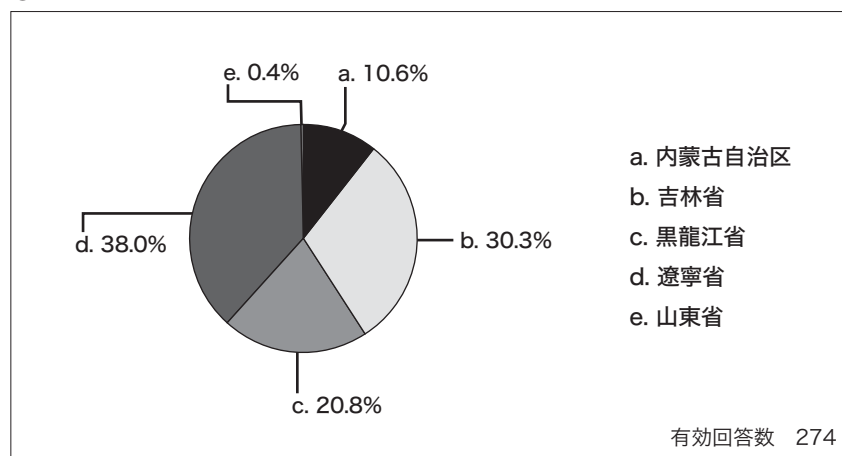
(3) 有効回答の内訳

有効回答の地域別、開催年別、教師歴別の内訳は以下のとおりである。

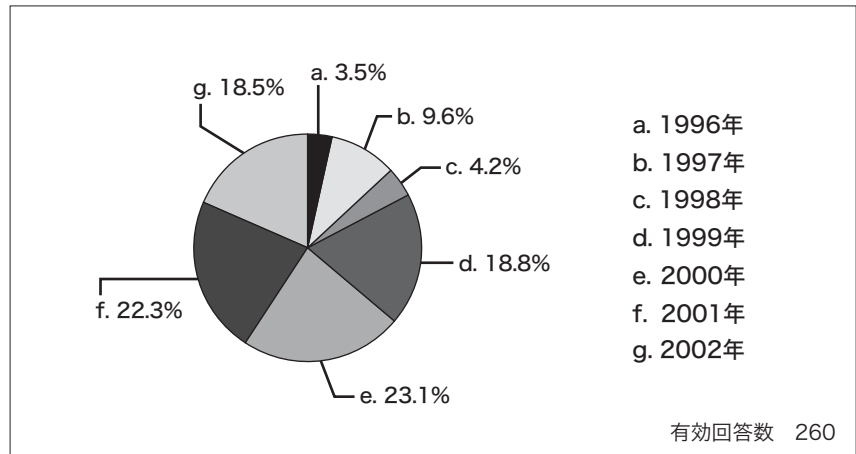
地域は、内蒙古自治区、吉林省、黒龍江省、遼寧省、山東省に分けた。教師歴は、1～5年、6～10年、11～15年、16～20年、21年以上に分けた。

なお、地域別は、重複参加を含め、274を有効回答とした。開催年別、教師歴別は、前述のとおり、重複参加者の回答を除いた260を有効回答とした。

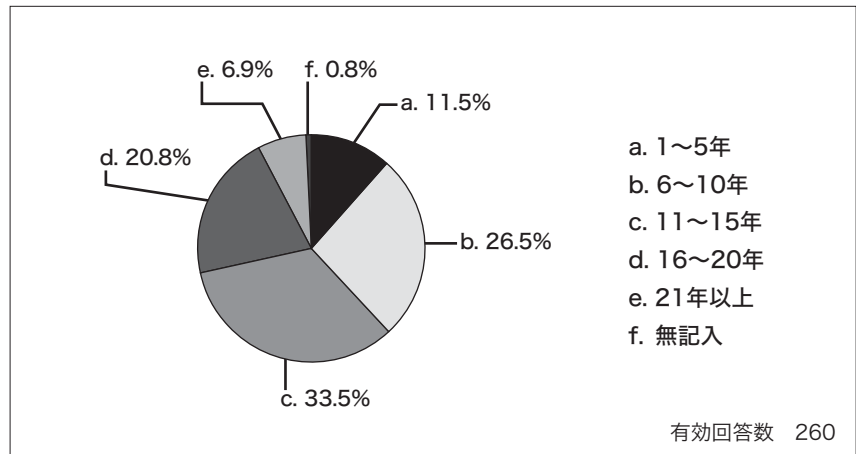
①地域別



②開催年別



③教師歴別



(4) 調査項目

調査票は15の質問から構成されており、回答方式としてQ2、Q8～10、Q13、Q15は自由記述式、その他は選択式(一部記述式)をとった。

本調査で質問した各項目の内容は次のとおりである(詳細は130～133頁参照)。

- ① 研修会に参加した当時、どの程度日本人との接触があったか(Q1)
- ② 研修会に何を期待していたか(Q2)
- ③ 研修会全体の評価(Q3)ならびに良かったことと良くなかったこと(Q4、Q5)
- ④ 研修会で得たことをその後の授業に生かしているか、生かしていないか。生かしている場合は何を生かしているか、生かしていない場合はその理由は何か(Q6～10)
- ⑤ 研修会で得た教材は活用しているか(Q11)
- ⑥ 研修会で知り合った他校の教師とのネットワークづくりはできたか(Q12)、今後ネットワークを望むか(Q14)
- ⑦ 研修会で意識は変わったか(Q13、Q15)

⑧ 「課程標準」を読んだことがあるか(Q16)

なお、調査票を作成するにあたって、2001年2～3月に国際交流基金の中等日本語教師招聘プログラムで来日中だった、本研修会の研修生14名に事前に予備調査を実施し、質問内容や構成、形式を調整した。

(5) 調査結果の集計

① Q2「研修会に何を期待していましたか」という質問に対する回答は記述式としたが、その回答内容を次のように分類、集計した。

日本語力、教授法、交流、日本文化事情、その他

② Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」の回答はa～kの選択式としたが、a～cの内容については次のような記述式とした。

- a 「日本語力が向上した。具体的に教えてください」
- b 「いろいろな教授法を学ぶことができた。例えばどんなことか、具体的に書いてください」
- c 「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった。例えばどんなことか、具体的に書いてください」

これらの記述回答については、それぞれ次のように分類、集計した。

- a：音声、会話力、聴解力、作文力、読解力、文法、その他
- b：音声、会話、聴解、作文、文法、授業の組み立て、読解、ロールプレイ・ゲームなどの教室活動、写真・カードなどの教具の使い方
- c：授業中の態度(授業中にやさしい口調で言ったり、ユーモアを交えたりするなどして教室のムードをよくし、生徒をほめるような教師の態度)、授業の形態(一方的な講義ではなく、生徒の参加を促し、多様な教室活動を取り入れるなど)、教師の意識(教師としての責任感をもつなど)

次節では、本調査の結果を踏まえて主に、「研修生のニーズに変化はあったか」「研修会に参加してどうだったか」「研修会で得たことは活かされているか」の3点から研修成果を検証したい。

なお、分析にあたっては、全体集計のほか、開催年別集計と教師歴別集計を必要に応じて使った。

「研修生のニーズに変化はあったか」「研修会に参加してどうだったか」については、全体集計のほかに開催年別集計を使った。これは、研修生のニーズの変化を捉えると同時に、成果とカリキュラムの関連を見るためである。

「研修会で得たことは活かされているか」については、全体集計のほかに教師歴別集計を使った。これは、研修会で得たことを授業で活かしているかどうかは、日本語教師としての経歴や経験の差が関係していると考えたからである。

2. 研修生のニーズに変化はあったか

研修会が行われた7年で、中国の中等教育レベルの日本語教育は大きく変わった。1996年の「教学大綱」改訂とそれに準拠した新しい教科書の完成、大学入試の内容の変化など、文法中心からコミュニケーション志向、そして素質教育へと日本語教育のめざすものは移行してきた。研修会でも、そのような変化をカリキュラムに反映させてきた。

では、日本語教育のこうした流れは研修生の意識、ひいては研修生のニーズに影響をもたらしたのだろうか。そのことをさぐるため、研修会に期待していたことを改めて聞いた。

(1) 研修生の期待：圧倒的に多い「日本語力の向上」

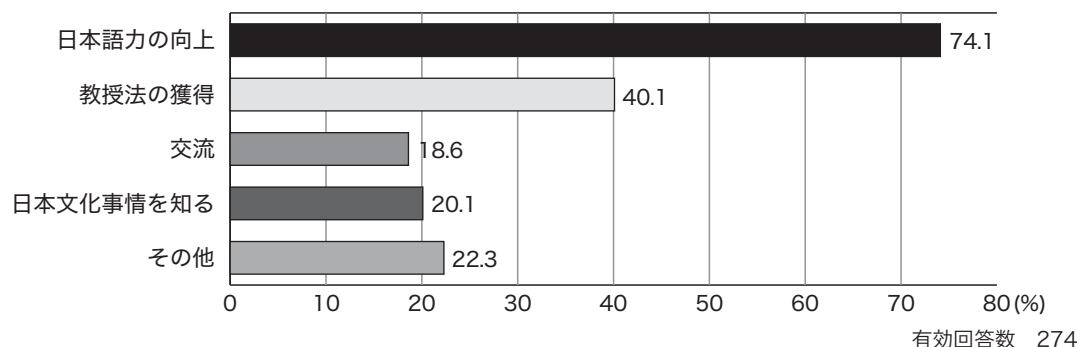
■全体集計

本調査では、「研修会に何を期待したか」(Q2)について自由記述で回答してもらった。その回答を「日本語力の向上」「教授法の獲得」「交流」「日本文化事情を知る」「その他」に分類したのが表1である。

その結果、「日本語力の向上」を期待した研修生が74.1%と圧倒的に多く、その次が「教授法の獲得」で、40.1%となっている。次いで、「日本文化事情を知る」「交流」が続く。「日本語力の向上」の割合が次の「教授法の獲得」を大きく引き離していることが、研修生のニーズを端的に表している。

その他には、「教材を得る」「日ごろの疑問を解決する」「自分の日本語力を検証する」などが含まれている。これらの回答からは、適切な教材があまりない、身近に情報交換できる相手がない、日本人と交流する機会がないなどの状況の一端が窺える。

表1：Q2「研修会に何を期待していましたか」(全体)



■開催年別集計

これを開催年別に上位3位を見ると(表2)、どの年も「日本語力の向上」を期待した研修生が多いことと、「教授法の獲得」を期待した研修生が年々増えていることが分かる。

表2：Q2「研修会に何を期待していましたか」（開催年別上位3位）

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	日本語力 (77.8)	日本語力 (56.0)	日本語力 (72.7)	日本語力 (77.6)	日本語力 (73.3)	日本語力 (82.5)	日本語力 (66.7)
第2位	教授法 (33.3)	教授法 (24.0)	日本文化事情 (54.5)	教授法 (36.7)	教授法 (45.0)	教授法 (40.4)	教授法 (50.0)
第3位	交流 (11.1) 日本文化事情 (11.1)	交流 (16.0)	教授法 (36.7)	日本文化事情 (26.5)	交流 (23.3)	交流 (19.3) 日本文化事情 (19.3)	交流 (16.7) 日本文化事情 (16.7)

()内は、各項目の全体に対する割合(%)

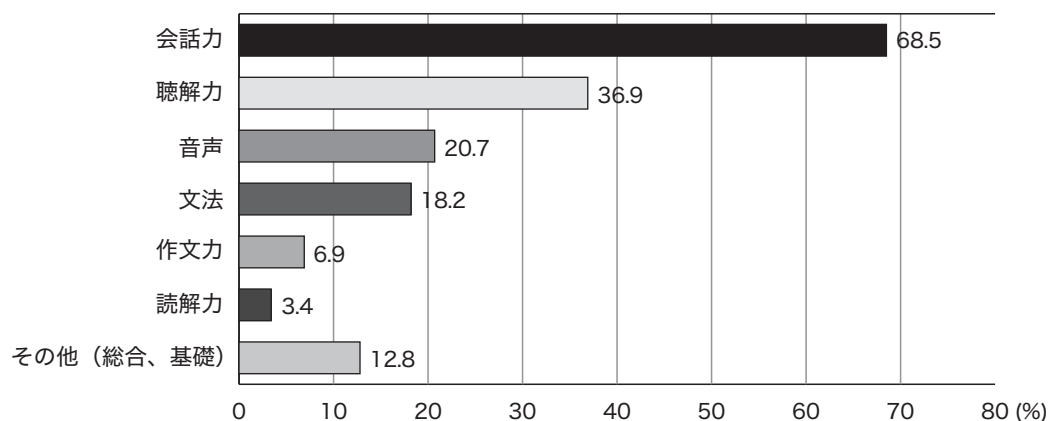
有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

(2) 期待した日本語力の内訳：7割近くが「会話力」の向上を期待

■全体集計

研修生たちがそのレベルアップに高い期待を寄せていた日本語力とは具体的にどんなものであったか。Q2で「日本語力の向上」に分類した回答内容をさらに技能別に分類してみた(表3)。「会話力」「聴解力」「音声」「文法」の順に回答が多く、特に「会話力」の向上を期待する研修生が圧倒的で7割近い。文法では、特に「類義表現の使い分けについて知りたい」と答えた人が多い。なお、どの技能を高めたいかを具体的に書かず、ただ「日本語力の向上」と書いた回答は「その他」に分類した。

表3：研修生が期待した日本語力の内訳(全体)



有効回答数 203

■開催年別集計

これを開催年別に上位3位に限ってまとめたのが表4である。どの年度も「会話力」の向上を望む研修生が圧倒的に多いことが分かる。その次に期待する人が多かったのは「聴解力」で、これも年々増加傾向を示し、大学入試に聴解問題が導入される2000年がピークになっている。研修

II. 研修会の成果をさぐる

会当初より「会話力」「聴解力」などへの期待が大きかったが、年を追うにつれその度合いがより強くなったといえるだろう。文法は初回は2位であったが、その後3位に落ち、2001年以降は4位以下に転落している。逆に音声は2000年から浮上してきている。

表4：期待した日本語力の内訳（開催年別上位3位）

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	会話力 (57.1)	会話力 (71.4)	会話力 (75.0)	会話力 (68.4)	会話力 (68.4)	会話力 (64.6)	会話力 (68.8)
第2位	文法 (28.6)	聴解力 (35.7)	聴解力 (25.0)	聴解力 (39.5)	聴解力 (45.5)	聴解力 (37.5)	聴解力 (28.1)
第3位	聴解力 (14.3)	文法 (28.6) 音声 (28.6)	文法 (25.0)	文法 (13.2)	文法 (20.5) 音声 (20.5)	音声 (27.1)	音声 (25.0)

()内は、Q2で「日本語力の向上」と回答した人の全体に占める割合(%)
有効回答数 1996年：7、1997年：14、1998年：8、1999年：38、2000年：44、2001年：48、2002年：32

3. 研修会に参加してどうだったか

研修生が研修会で得たことは何なのか、得られなかったことは何なのかを聞くことで、日本語力の向上、教授法の獲得、ネットワークの形成という研修会の大きな目的は達成されたのかについて検証した。また、それら以外の成果はあったのかどうかについてもさぐってみた。

(1) 総体評価：全体的に好評

「研修会に参加してどうだったか」(Q3)という質問に対する回答結果を見てみよう。「どちらともいえない」「良くなかった」と回答した研修生はおらず、「まあまあ良かった」「大変良かった」に回答が集中した(表5)。「大変良かった」が全体で7割を超えており、開催年別(表6)に見ても、全体的に好評だったことが分かる。

表5：Q3「研修会に参加してどうでしたか」(全体)

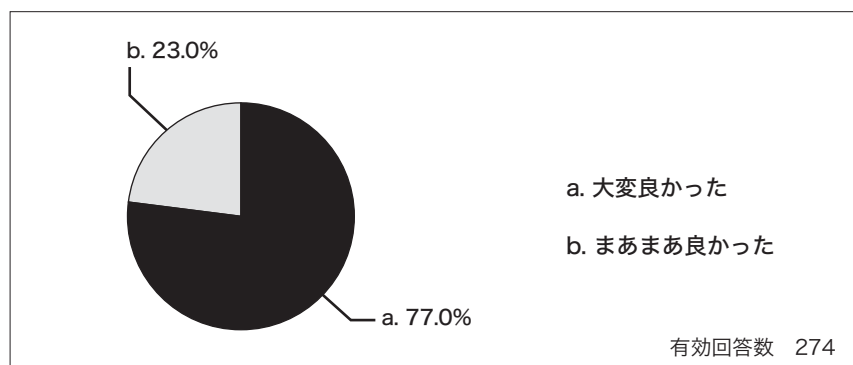
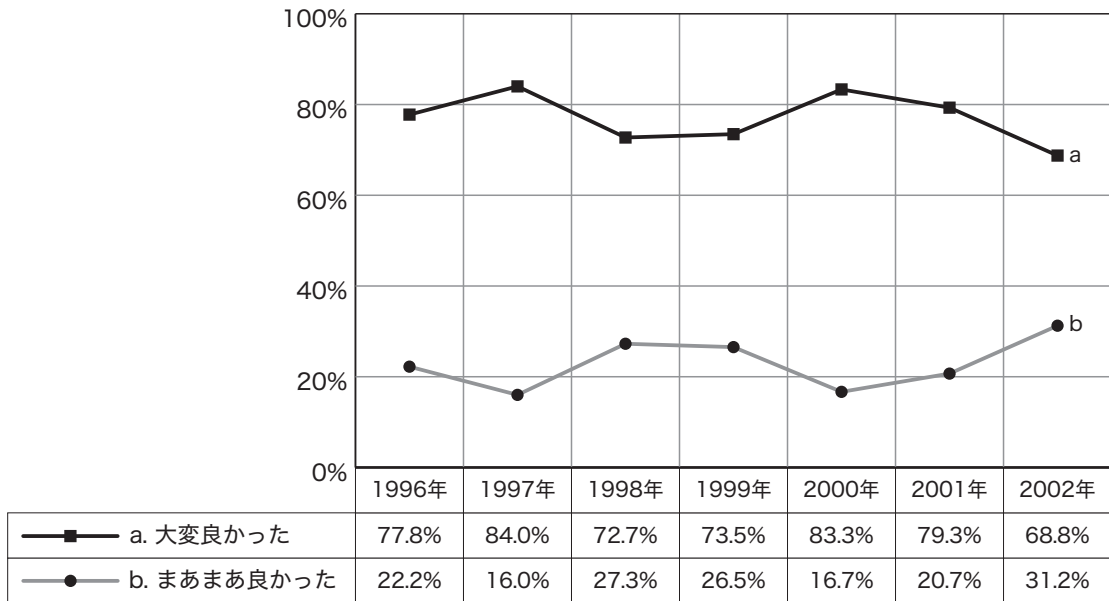


表6：Q3「研修会に参加してどうでしたか」(開催年別)



有効回答数 260

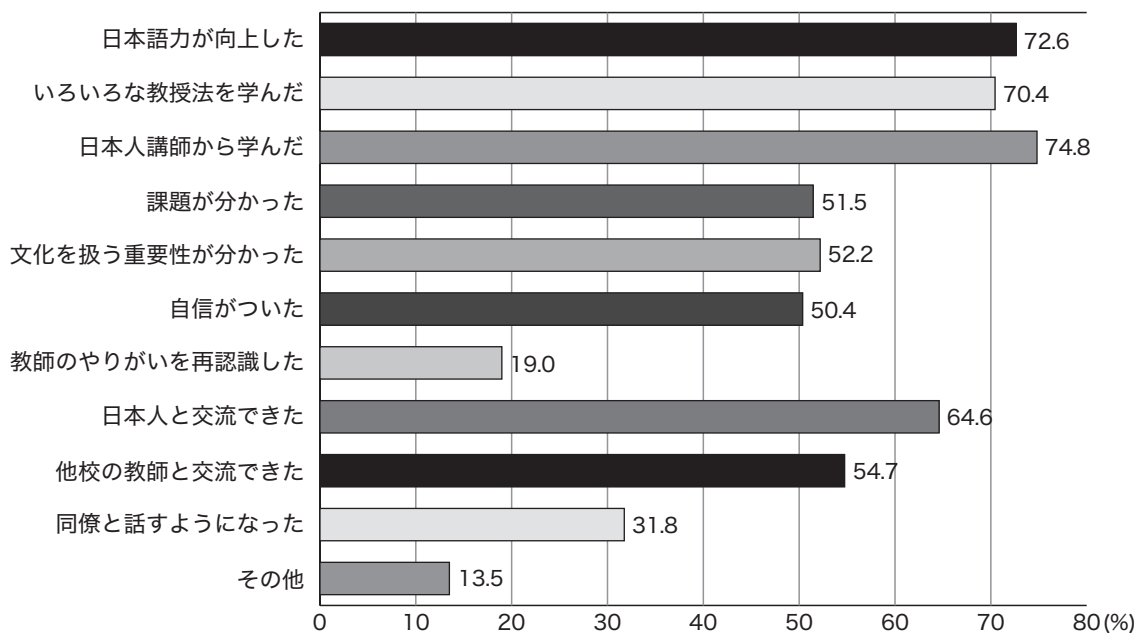
(2) 参加して良かったこと:日本語や教授法だけでなく教師の姿勢も学んだ

次に、「研修会に参加して良かったことは何ですか」(Q4)という質問について選択と自由記述で回答してもらった結果(表7)を見てみよう。

■全体集計

良かった点としては「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」

表7：Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」(全体)



有効回答数 274

II. 研修会の成果をさぐる

がもっとも多く、次に「日本語力が向上した」「いろいろな教授法を学ぶことができた」が並ぶ。このように、教師としての資質や能力に関する回答が上位3位を占め、いずれも7割を超えている。

次に多いのは、「日本人と交流できた」「他校の教師と交流できた」という回答であった。さらに「日本語教育のなかで、文化を扱う重要性が分かった」「日本語力、または日本語教師としての課題が分かった」「日本語を話す自信がついた」などの項目を選択した研修生が約半数いた。

また、約3割の人が「研修会后、日本語の教え方について研究したり、同僚と意見を交換したりするようになった」という項目を選択していることは注目に値する。「その他」では「貴重な教材をもらったこと」「疑問が解決したこと」「日本文化事情について知ったこと」などを良かった点として挙げている。

■開催年別集計

開催年別の上位5位(表8)を見ると、「いろいろな教授法を学ぶことができた」は、年を追うごとに数が増え、順位も上げている。それに対して「日本語力が向上した」は、どの年度も6割以上だが、順位は落ちている。研修会前の期待を見ると(表2、51頁参照)、どの年も「日本語力」が1位であるが、実際研修会に参加してみて、期待以上に「教授法」を獲得した人が年を追うごとに増えているといえる。

また、「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」という回答も年を追うごとに増えている。これは、21世紀の教育改革で推し進めている「素質教育」の理念が少しずつ現場に浸透し、生徒の主体性と、生徒と

表8：Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」(開催年別上位5位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	日本語力が向上した(77.8)	日本語力が向上した(76.0)	日本人と交流できた(90.9)	日本語力が向上した(85.7)	日本人講師から学んだ(80.0)	日本人講師から学んだ(81.0)	いろいろな教授法を学んだ(75.0)
第2位	文化を扱う重要性が分かった(66.7)	文化を扱う重要性が分かった(64.0)	日本語力が向上した(72.7)	日本人講師から学んだ(69.4)	いろいろな教授法を学んだ(75.0)	いろいろな教授法を学んだ(70.7)	日本人講師から学んだ(72.9)
第3位	日本人と交流できた(66.7)	日本人講師から学んだ(64.0)	日本人講師から学んだ(72.7)	いろいろな教授法を学んだ(67.3)	日本語力が向上した(73.3)	日本語力が向上した(69.0)	文化を扱う重要性が分かった(64.6)
第4位	いろいろな教授法を学んだ(55.6)	課題が分かった(56.0)	いろいろな教授法を学んだ(63.6)	日本人と交流できた(63.3)	日本人と交流できた(70.0)	日本人と交流できた(63.8)	日本語力が向上した(62.5)
第5位	日本人講師から学んだ(55.6) 課題が分かった(55.6) 他校の教師と交流できた(55.6)	いろいろな教授法を学んだ(52.0) 自信がついた(52.0)	文化を扱う重要性が分かった(63.6)	自信がついた(61.2)	他校の教師と交流できた(58.3)	他校の教師と交流できた(63.8)	日本人と交流できた(60.4)

()内は、各項目の、Q4の全回答に占める割合(%)

有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

教師間の協働を重視する流れが、講師の教え方や授業運び、生徒や日本語教育に対する態度・姿勢と共鳴した、といえるだろう。

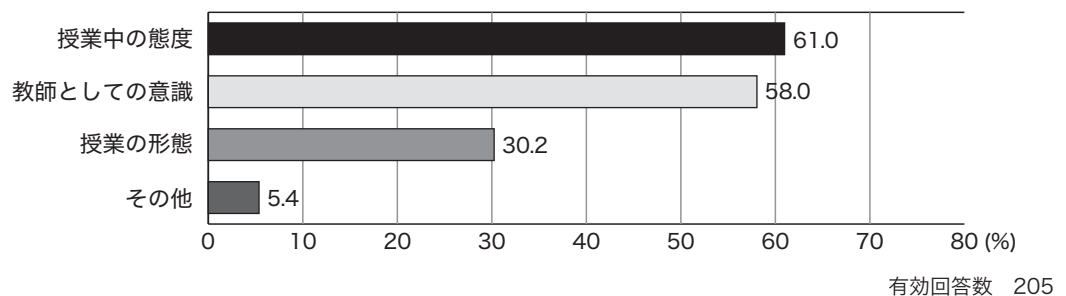
1998年はほかの年と異なり、「日本人との交流」が1位になっている(表8)。この年は日本からの特別講師、高校中国語講師との交流に加え、開催地であるハルビンの日系企業の駐在員などとの交流が印象に残った研修生が多かったようである。また、「文化を扱う重要性が分かった」に関する回答で、合同開催だった最初の3回と最終回の数値が高いのは、文化理解に関する特別講義やTJFの写真教材を使った文化理解ワークショップ、および課外で行った文化体験プログラム(風呂敷の使い方体験など)の実施と関連していると思われる。「文化理解」や「交流」に対する研修生の期待はおしなべて10～20%台で高くはなかったが、研修会後には70%台に上がっていることから、カリキュラムやプログラムに意図的に組み込んだことの成果が出たといえる。

次に、7回の研修会を通じて、「参加して良かったこと」(表7)の上位3位の内訳を見てみよう。

①「日本人講師から学んだ」の内訳

研修成果としてトップに挙げられている「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」とは具体的にどんなことか。自由記述を分類(表9)すると、「授業中の態度(微笑み、優しい口調、ほめる、ユーモア、辛抱強く対応など)」「教師としての意識(十分な授業準備、時間厳守、責任感や誇り、まじめで一生懸命など)」「授業の形態(多様な教え方、生徒参加型、生徒主体)」に大別することができる。教室内外における講師の意識や姿勢、立ち居振る舞いすべてから研修生は学びとるものがあつた、ということである。

表9：Q4で「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」とした回答の内訳

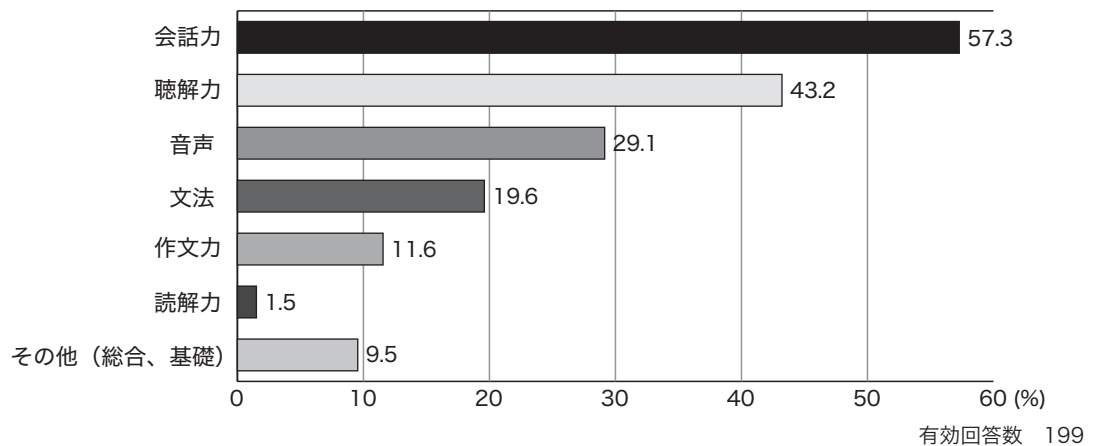


②「日本語力が向上した」の内訳

■全体集計

「日本語力が向上した」を選択した研修生の指す「日本語力」の内訳は何か。自由記述を分類(表10)してみると、「会話力」「聴解力」「音声」が上位3位を占め、次に「文法」が続く。この結果は、2節の「研修生の期待」(表3)と一致している。

表 10：Q4で「日本語力が向上した」とした回答の内訳



■開催年別集計

開催年別の上位3位(表11)を見ると、「会話力」「聴解力」の順に高くなっており、「文法」と「音声」はそれに続くが、2000年以降、「文法」が上位3位から転落している。

表 11：Q4で「日本語力が向上した」とした回答の内訳 (開催年別上位3位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	会話力 (57.1)	会話力 (78.9)	会話力 (50.0)	会話力 (57.1)	会話力 (56.8)	聴解力 (55.0)	会話力 (56.7)
第2位	聴解力 (28.6) 文法 (28.6)	聴解力 (47.4)	聴解力 (37.5)	聴解力 (42.9)	聴解力 (43.2)	会話力 (50.0)	音声 (33.3)
第3位		音声 (26.3)	音声 (25.0) 文法 (25.0)	文法 (28.6)	音声 (40.9)	音声 (20.0)	聴解力 (26.7)

()内は、Q4で「日本語力が向上した」とした全回答に占める割合 (%)
有効回答数 1996年：7、1997年：19、1998年：8、1999年：42、2000年：44、2001年：40、2002年：30

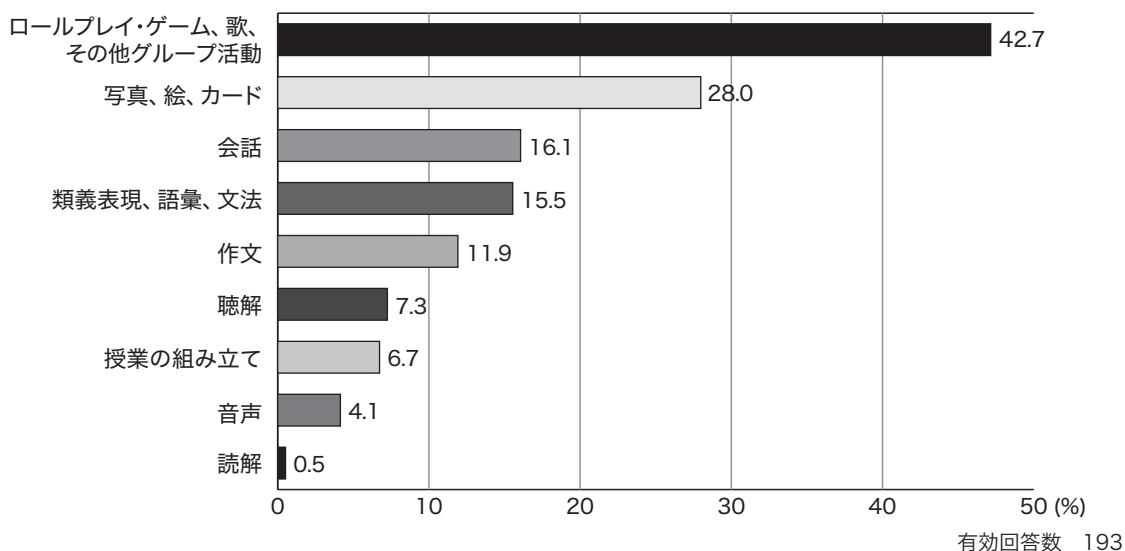
研修生の声——「日本人講師から学んだ」(Q4の記述式回答より)

- 微笑を絶やさず、穏やかで身近、まじめで責任感があります。教授法は多様で、理解しやすい。日本人講師のように生徒に日本語を教えたなら、生徒たちはきっと興味を示すと思います。
- 日本人講師のまじめな態度と分かりやすい教え方に心を打たれ、私も同じようにしようと思いました。
- 授業中、和やかで楽しい雰囲気をつくって、私たちの積極的な発言を鼓舞し、自信をもたせてくれました。また、私たちの人格を尊重し、終始笑みをうかべ、対等な立場に立っていました。
- 授業中、態度が和やかで自然だったのが印象深く残っています。私も真似していますが、効果があります。
- コマの授業のために、苦勞を惜しまず準備をすること。授業では、生徒の興味をひく教授法を多様に使うこと。そして、教師は根気強さとユーモア、常に研究する態度が必要であることなどを学びました。
- 授業は、学習意欲を刺激するような形式をとり、生徒の積極性を十分に引き出すことが重要だと分かりました。さまざまな教室活動を取り入れたら、学習効果もありました。また、笑顔で授業をすることを学びました。以前はいつもこわばった顔で、厳粛に授業をしていたが、研修会で、生徒の立場になったことで、生徒の気持ちが体験できました。私は、笑顔で授業をする先生が大好きでした。

③「いろいろな教授法を学んだ」の内訳

Q4で「いろいろな教授法を学ぶことができた」を選択した研修生の指す「いろいろな教授法」の内訳は何か。自由記述を分類してみると、表12の結果となった。もっとも多いのは「ロールプレイ・ゲーム、歌、その他グループ活動」で、次に多いのは「写真、絵、カード」である。つまり、視覚教材や教具の活用方法やさまざまな教室活動の仕方が中心で、全体の7割を超えている。これらは、「教授法(教室活動、教材・教具)」と題する講義の中で扱ったものもあるが、技能別講義の中で講師が用いた教授法や、講義で行った教室活動から学んだようである。同様に、「会話」「文法」「聴解」「音声」「読解」の項目に関しても、「会話の教え方」「文法の教え方」「聴解の教え方」など教授法に特化した講義はなかったことから、研修生自身の日本語力向上を第一目的とした講義から、教授法を学んだようだ。つまり、研修生は講師の教え方を見て学んだことも多いといえるだろう。

表12：Q4で「いろいろな教授法を学ぶことができた」とした回答の内訳



(3) がっかりしたこと、辛かったこと:研修期間が短かった

■全体集計

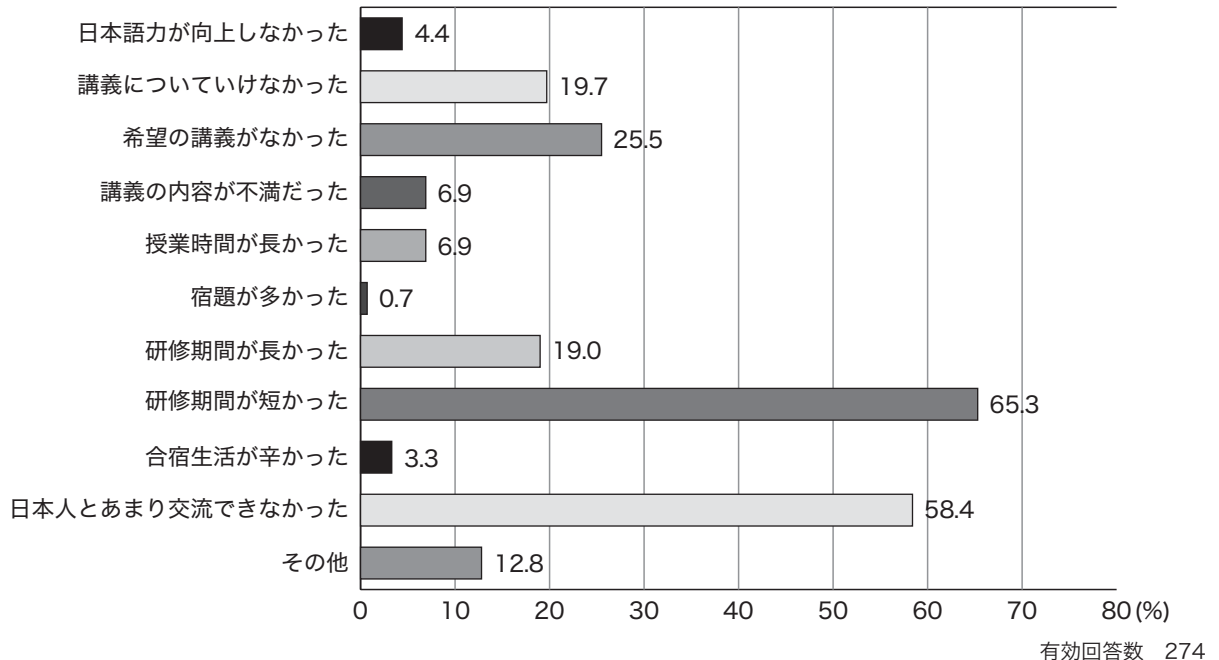
「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」というQ5に対する回答結果(表13)で、最も多かったのは「研修期間が短かった」(65.3%)、次いで「日本人とあまり交流できなかった」(58.4%)である。次に多かった回答は、「希望の講義がなかった」(25.5%)、「講義についていけなかった」(19.7%)である。

「研修期間が短かった」という回答結果からは、研修生の研修に対する積極的な参加姿勢が窺える。しかし、研修会当初から積極的に臨んでいたわけではない。毎回研修会の最終日に行うアンケートや意見交換会での研修生の発言から、研修会参加当初はむしろ「2週間は長いな」とか、「2週間ではたいしたことが学べるはずがない」などと思っていた研修生が

少なくなかったようである。ところが、研修会が終わってみて、「こんなに勉強になるとは思わなかった」「毎年参加したい」と訴える研修生が多かった。一方、「研修期間が長かった」という回答も若干あった。これは、家庭や小さい子どもを持つ女性が多数を占めており、家を長く空けるのが難しいという事情を抱えている研修生も多かったことと関連しているだろう。

「日本人とあまり交流できなかった」という回答が6割近いが、(2)参加して良かったこと(表7、53頁参照)の中で「日本人と交流できた」が6割を超えていることから、ある程度交流に対するニーズは満たしている。つまり、「日本人とあまり交流できなかった」という不満は、「もっと交流したかった」という希望の表れと見ることもできよう。

表13：Q5「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」(全体)



どんな講義を希望していたか

「希望の講義がなかった」と回答した研修生には、どんな講義を希望していたのか自由記述で回答してもらった。回答の中には「会話」「聴解」「類義表現の使い分け」「アクセント、音声」「作文指導法」などのように、カリキュラムに組み込まれていた講義も含まれている。これは、希望する講義のコマ数の少なさに対する不満だったと推測できる。また、ほとんどの年度で大学入試対策についての講義を聞きたかったという回答があり、関心の高さが窺えた。カリキュラムに組み込まれていなかった講義で、希望のあったものは、日本の中等教育の現状や教育制度の紹介、日本の中高校での外国語指導法、日本人講師による中国の生徒に対する教授法、などがあつた。実際、研修会の会期中にも、「日本人講師が中国で使用されている実際の日本語教科書を使って、一コマ分または一課分の授業を最初から最後まで実演してほしい」という研修生の声が毎回あつた。これについては、「日本人

講師の教え方＝模範的な教え方」という図式につながる恐れがあること、現場に合った教え方は現場の教師がもっともよく知っているのだから、現場教師の創意・工夫を引き出すような研修を行いたいという講師を含む主催者側の強い意向から、カリキュラムに組み入れることをあえて避けていたためである。

2002年の研修会に参加した教師からは「インターネットを活用した授業の仕方」を学びたかった、という回答があった。これは、中国の教育現場にもパソコンが普及しつつあるという時代の状況を反映している。

■開催年別集計

開催年別上位5位(表14)を見ると、「日本人とあまり交流できなかった」は、合同開催だった前3回に集中している。しかし、この3回は他の回に比べて日本人との交流プログラムが充実していた。これは「もっと交流したかった」「深く交流したかった」という不満だったかもしれない。

「講義についていけなかった」は、1996年がもっとも多く、その後減るが、毎年研修生の一定の割合を占めている。この問題については、第1回(1996年)の研修会後に解決すべき課題として捉え、研修会参加条件に「日本語による講義を理解できる聴解力を有すること」を加えるなどの対策を講じたが、結局最後まで完全に解決できなかった。

表14：Q5「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」(開催年別上位5位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	研修期間が短かった (77.8)	研修期間が短かった (72.0)	日本人とあまり交流できなかった (72.7)	研修期間が短かった (79.6)	研修期間が短かった (78.3)	研修期間が短かった (70.7)	研修期間が短かった (56.3)
第2位	日本人とあまり交流できなかった (77.8)	日本人とあまり交流できなかった (72.0)	研修期間が短かった (63.6)	日本人とあまり交流できなかった (61.2)	日本人とあまり交流できなかった (46.7)	日本人とあまり交流できなかった (62.1)	日本人とあまり交流できなかった (56.3)
第3位	講義についていけなかった (55.6)	希望の講義がなかった (20.0)	希望の講義がなかった (27.3)	希望の講義がなかった (28.6)	希望の講義がなかった (33.3)	講義についていけなかった (24.1)	希望の講義がなかった (29.2)
第4位	講義の時間が長かった (33.3)	講義についていけなかった (12.0)	講義についていけなかった (9.1)	講義の内容に不満 (12.2)	講義についていけなかった (21.7)	希望の講義がなかった (15.5)	講義についていけなかった (16.7)
第5位	希望の講義がなかった (22.2)	講義の時間が長かった (8.0)	日本語力が向上しなかった (9.1) 講義の時間が長かった (9.1)	講義についていけなかった (10.2)	講義の時間が長かった (10.0)	講義の内容に不満 (6.9)	講義の内容に不満 (6.3)

()内は、各項目の全体に対する割合(%)

有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

4. 研修会で得たことは生かされているか

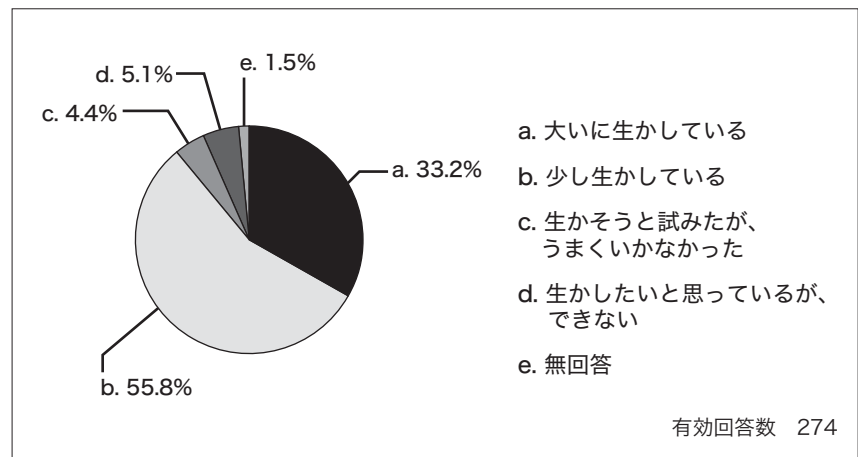
教師研修の成果をみると、研修生が研修会で得たことを教室で生かしているかどうかが大きく問われることとなる。何をどのように生かしているのか、また生かしていない場合は、何が障壁となっているのかをさぐってみた。

(1) 学んだことを授業で生かしているか：9割近くが「生かしている」

■全体集計

まず、Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」という質問の回答結果(表15)を見てみよう。「大いに生かしている」は33.2%、「少し生かしている」は55.8%、合わせて89%の人が「生かしている」と答えている。一方、「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」と答えた人が、それぞれ4.4%、5.1%いた。

表15：Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」(全体)

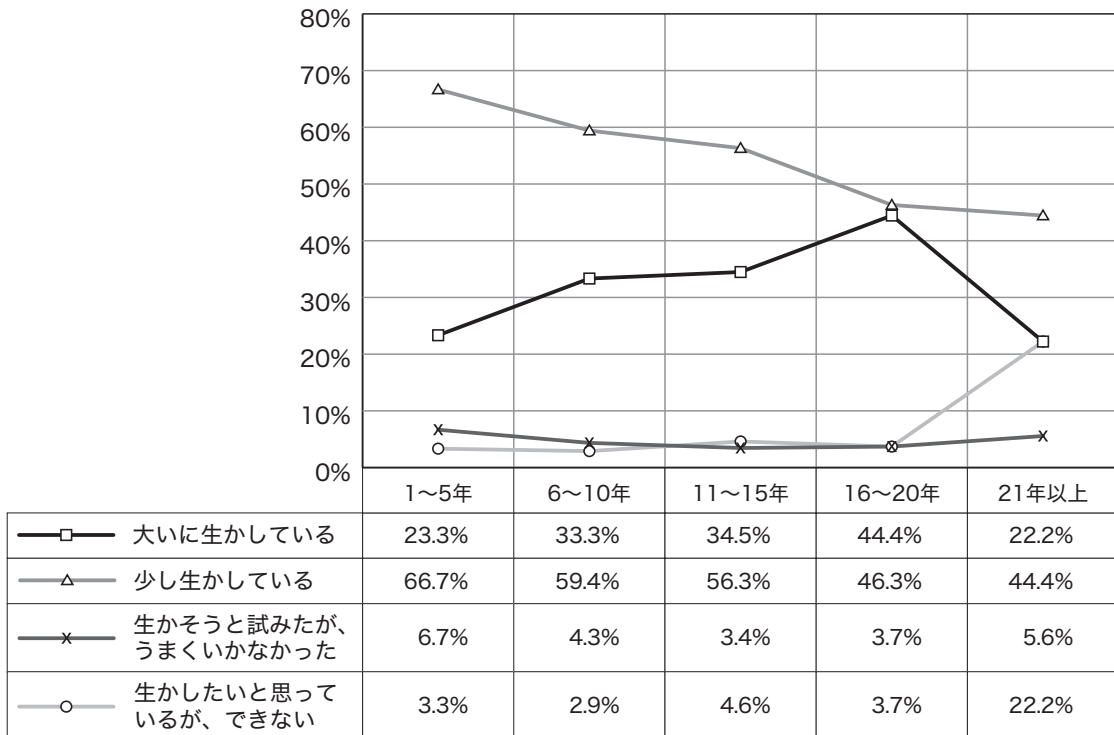


■教師歴別集計

次に教師歴別(表16)を見てみよう。教師歴が長くなるほど、「大いに生かしている」と答える人の割合が多くなっていて、教師としての蓄積が研修成果と相乗効果となって現場に還元されたといえる。しかし、教師歴が21年以上の教師では、「生かしている」という回答の割合が下がり、「生かしたいと思っているが、できない」という割合が他の層と比べて高くなっているのが特徴である。自分の教授スタイルを確立している長い経歴をもつ教師ほど、新しい教授スタイルに対応しにくいようだ。このことは、研修会で行われた模擬授業後の討論からも分かる。若手教師が行うチャレンジな模擬授業に対して、ベテラン教師は「その授業は課を何回に分けた何コマめの授業ですか」と質問し、その答えに対して「それならば、こういうやり方をすべきだ」とコメントすることがよくあった。つまり、ベテラン教師の普段の授業が一定のスタイルにのっとなって組み立てられていることが

よく感じられるのであった。

表 16：Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」(教師歴別)



有効回答数 1～5年：30、6～10年：69、11～15年：87、16～20年：54、21年以上：18 無記入：2

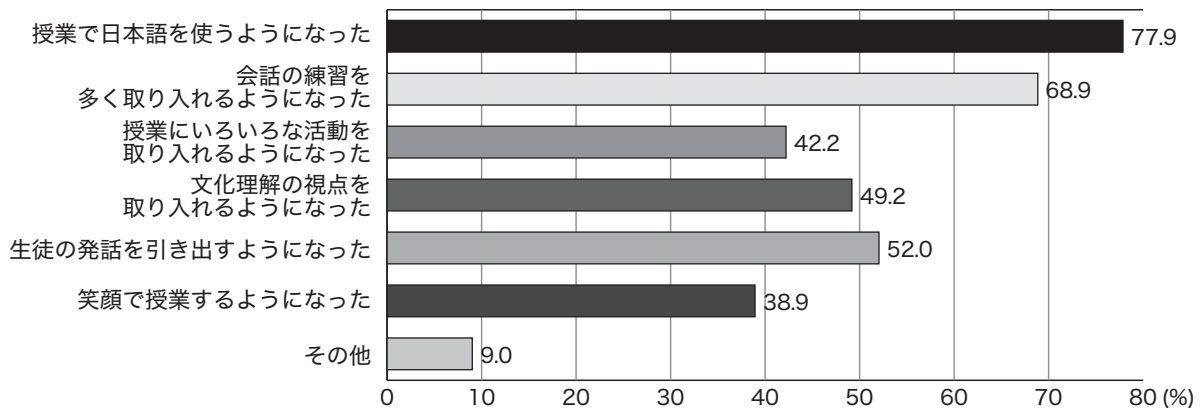
①何を授業に生かしているか

■全体集計

次に、Q6で「大いに生かしている」「少し生かしている」と答えた人に、Q7で「どういうことを授業で実践していますか」と聞いてみた結果が表17である。

8割近い人が「授業で日本語を使うようになった」と答えている。これは

表 17：Q7「どういうことを授業で実践していますか」(全体)



有効回答数 244

II. 研修会の成果をさぐる

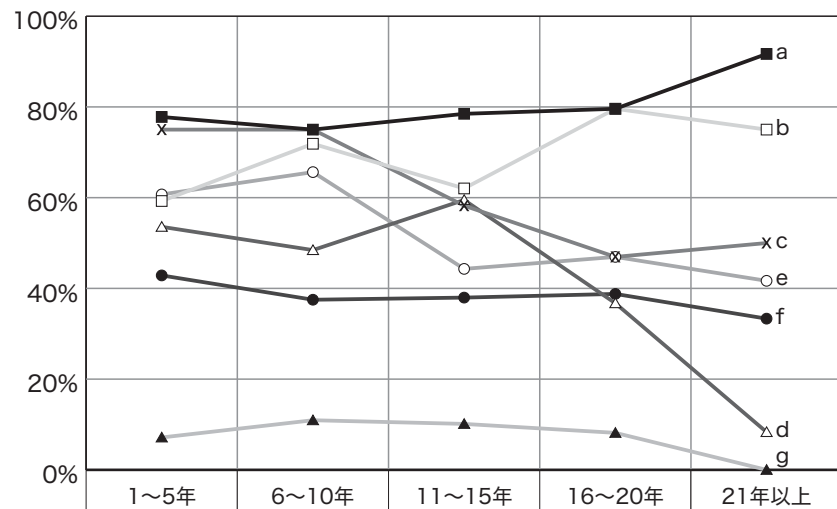
教室用語を含め、授業運びをそれまで母語で行っていたものを日本語で行うようになった、ということである。また、7割近い人が「会話の練習を多く取り入れるようになった」と答えている。「読み」「書き」「文法」が従来の授業スタイルであることを考えると、大きな進歩である。また、「生徒の発話を引き出すようになった」「文化理解の視点を取り入れるようになった」と回答した人も5割ほどいることから、2000年以降推し進められている「学習者を学びの主体とし、素質教育をめざした日本語教育」の理念が受け入れられつつあることが分かる。

■教師歴別集計

次に、教師歴別(表18)を見てみよう。教師歴が長いほど「授業で日本語を使うようになった」「会話の練習を多く取り入れるようになった」と回答した人が多いことが分かる。それまでが、そういったことが少なかったということもあり、それだけ変化の値が大きくなっていると考えられる。

しかし、一方で、「文化理解の視点を取り入れるようになった」り、「授業にいろいろな活動を取り入れるようになった」り、「生徒の発話を引き出すようになった」り、「笑顔で授業するようになった」りする面では、教師歴が長い(年齢が高い)人ほど消極的で、教師歴が短い(年齢が低い)人ほど

表18：Q7「どういことを授業で実践していますか」(教師歴別)



■	a. 授業で日本語を使うようになった	77.8%	75.0%	78.5%	79.6%	91.7%
□	b. 会話の練習を多く取り入れるようになった	59.3%	71.9%	62.0%	79.6%	75.0%
x	c. 授業にいろいろな活動を取り入れるようになった	75.0%	75.0%	58.2%	46.9%	50.0%
△	d. 文化理解の視点を取り入れるようになった	53.6%	48.4%	59.5%	36.7%	8.3%
○	e. 生徒の発話を引き出すようになった	60.7%	65.6%	44.3%	46.9%	41.7%
●	f. 笑顔で授業するようになった	42.9%	37.5%	38.0%	38.8%	33.3%
▲	g. その他	7.1%	10.9%	10.1%	8.2%	0.0%

有効回答数 1～5年：30、6～10年：69、11～15年：87、16～20年：54、21年以上：18 無記入：2

人ほど積極的であることがわかる。言い換えれば、新しい教育理念やそれに基づく新しい教授法および授業スタイルの吸収と実践に関しては、若い教師ほど柔軟で、順応性が高いといえるだろう。

②生徒の反応はどうか

教師たちの新しい試みについて、生徒たちはどのような反応を示しているかを知るための質問がQ8「新しい試みをして、生徒の反応はどうでしたか」である。

ほとんどの教師が「とても反応がいい」「歓迎されている」と答えている。しかし一方で、「生徒の聞き取りは明らかに向上したが、日本語のレベルが比較的低い生徒は苦勞している」「適応できる生徒と適応できない生徒がいる」「おおむね生徒に好評だが、筆記試験に対応する能力が下がった」というコメントもあり、さらにごく少数であるが「あまりいい反応とはいえない」という回答もあった。

生徒の反応例は以下のとおりである。

- ・日本語に対する興味が高まり、学習意欲が上がった。
- ・積極的に会話練習に参加するようになった。
- ・教室の雰囲気が活発になった。
- ・楽しそうに授業に臨むようになった。
- ・主体的に学ぶようになった。
- ・はじめのうちはなれなかったが、だんだん受け入れた。

③生かせない理由は何か

「大いに生かしている」「少し生かしている」と答えた教師の中にも、その試みが必ずしもすべて成功しているとはいえない事例があることは、②の「生徒の反応」でも分かる。Q6で「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」と答えた理由は何か、Q9とQ10で聞いてみた。

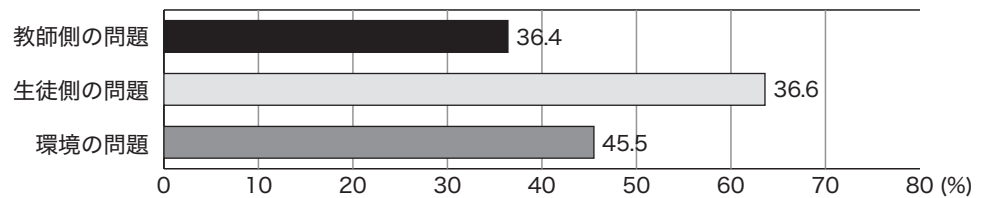
その結果、「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」の理由として記述された回答(表19、20)は、大体において共通している。それらは「教師側の問題」「生徒側の問題」「日本語教育を取り巻く環境の問題」に大きく分けることができる。

教師側の問題としては、教える技術や日本語力の不足、日本体験のなさといったことを挙げている。生徒側の問題としては、単語量が少ない、日本語力もしくは学力そのものが低いといったことを挙げている。日本語教育を取り巻く環境の問題として、教材(特に聴解教材や会話教材)がない、クラスの人数が多すぎる(80人のクラスもある)、教科書で学習すべき内容が多くて時間的余裕がない、日本語クラスがなくなっている、といったことを挙げている。

日本語教師を取り巻く環境の問題は教師にとっては切実である。しかし、

「生かそう」という気持ちを失わない限り、どこかでチャレンジするものと思われる。研修会で研修生たちに「自分もやってみよう」「何か工夫してみよう」という意識をもってもらうことが第一歩だと考える。

表 19：「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」理由



()内は、Q6で「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」と回答し、9で記述した全回答に占める割合 (%)
有効回答数 11

◆生かそうと試みたが、うまくいかなかったのはなぜか

記述例は次のとおりである。

〈教師側の問題〉

- ・日本人の生活習慣や日本文化について生徒に教えるが、自分自身体験したことがないので説得力がない。そのうち扱うのを避けるようになった。
- ・文化と伝統を紹介したが、内容が浅く、知識も足りないので、生徒の興味を引き出せなかったし、自分としてもつまらなく終わった感じが否めない。
- ・会話がうまくいかない。なぜなら、私自身が日本人のコミュニケーションスタイルを知らないから。

〈生徒側の問題〉

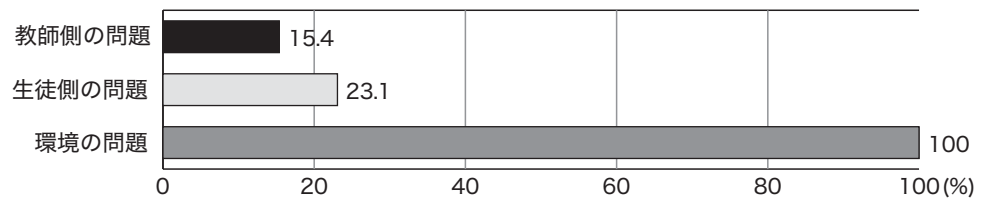
- ・「写真パネルバンク」を使って文化を紹介したり、日本の行事に関する音声テープを聞かせたりした。しかし、生徒の聴解力が必要レベルに達しておらず、うまくいかない。
- ・ゲームを取り入れようとしたが、うまくいかなかった。生徒の日本語力の基礎が弱く、単語量も少ないから。
- ・ロールプレイを何度も試みたが、生徒は日本語を話すのにも苦労しているし、演技も下手でうまくいかない。

〈環境の問題〉

- ・いろいろなゲームを試みたが、一クラス70人という大人数のため、ゲームをすると、どの生徒も自己表現をしたがるから混乱する。
- ・コミュニケーション力を高めようと、会話練習をさせたが、生徒数が多すぎるため、授業がめちゃくちゃになるときがあるし、ぜんぜん活気がないときもある。
- ・英語の聴解教材は多いが、日本語の聴解教材は少ない。特に生徒に合うものが少なすぎる。

◆生かしたいと思っているが、できないのはなぜか

表 20：「生かしたいと思っているが、できない」理由



()内は、Q6で「生かしたいと思っているが、できない」と回答し、10で記述した全回答に占める割合(%)
有効回答数 13

記述例は次のとおりである。

〈教師側の問題〉

- ・類義表現の使い分けを教えたいが、自分がその言語を実際に運用する機会が少なく、日本人と交流したり、日本での生活を体験したりすることがないうえ、資料も少ないので、実現する方法がない。
- ・コミュニケーション表現を授業に取り入れたいが、自分の知識に限界があるので、なかなかできない。
- ・日本語で授業したいが、自分の日本語力ではできない。

〈生徒側の問題〉

- ・ゲームをして生徒の興味や学習意欲を高めたいが、一クラスの人数が多いし、生徒の語彙数が足りない。
- ・コミュニケーション力を付けさせたいが、学力の高い生徒は英語のクラスに集中し、日本語のクラスには学力の低い生徒ばかりで難しい。

〈環境の問題〉

- ・日本の文化や習慣や自然などを紹介したいが、ふさわしい教材・教具がない。インターネットを活用する環境もない。
- ・聴解や会話に関して学んだことを生かしたいと思った。でも、英語だと高校生に合った聴解教材がたくさんあるのに、日本語ではほとんどないので、取り入れられない。
- ・ゲームを取り入れた授業をしたかったが、一クラスの人数が多すぎてできない。また、毎週20コマの授業をこなさなければならないので、新しい教具を準備する余裕がない。
- ・教える内容が多すぎて、会話練習のための時間が取れない。
- ・ペアワークやグループワークを取り入れたいが、クラスの人数が多すぎる(70～80名)。

(2) ネットワークづくりはできたか：5割近くが現在も「連絡を取り合っている」

①連絡を取り合っているか

研修会の目的の一つに「ネットワークづくり」がある。これは、普段他校の

II. 研修会の成果をさぐる

教師と知り合う機会があまりなく、孤軍奮闘している現場教師が多い状況のなか、研修会を通じて、研修生同士が交流できる土台をつくることが重要だと考えたからである。この目的がどの程度達成されたかを見るための質問がQ12である。回答結果は表21のとおりである。半数近くが現在も連絡を取り合っていることが分かる。「取り合っている」と答えた教師のうち、連絡を取り合っている相手の多くは市内で、次が省内の市外となっている(表22)。連絡を取り合っている場合、「どんな情報を交換しているか」という質問に対する回答結果が表23である。「教え方」「大学入試など試験に関する情報・資料」に関する回答が多く、ほぼ同数になっている。次に多いのは「授業で使う教材・資料」に関する回答である。

表21：Q12「研修会で知り合った他校の教師と連絡を取り合っていますか」(全体)

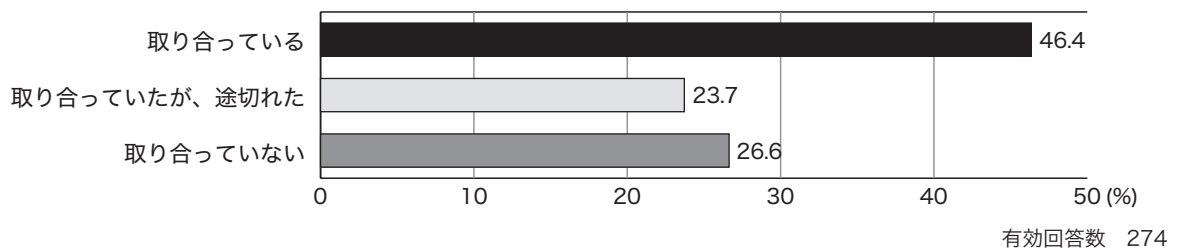


表22：Q12-①「どの地域の先生とですか」(全体)

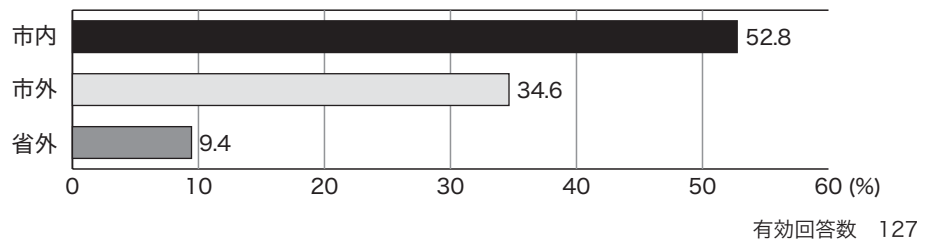
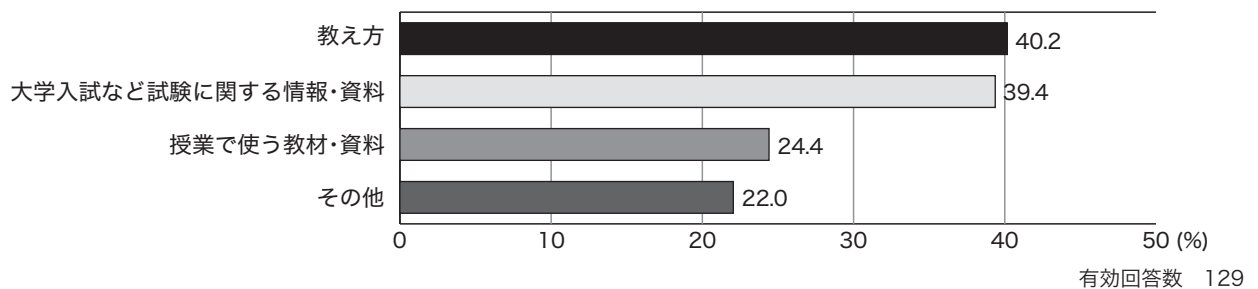


表23：Q12-②「どんな情報を交換していますか」(全体)



「教え方」についての情報交換の詳細は以下のとおりである。

- ・お互いの生徒の学習状況、理解の状況はどうか。
- ・効果的な作文指導法はないか。
- ・生徒にうまく伝わらないときや効果的に能力育成ができないときにどう対応したらいいか。
- ・新しい教え方はないか。
- ・生徒の学習意欲と興味をどのように引き出すか。
- ・どのようにクラスを活発な雰囲気にするか。

「その他」の項目には、以下のことが含まれている。

- ・日本に関する情報
- ・日本への留学情報
- ・教育改革や日本語教育の動向
- ・現在抱えている問題
- ・各学校の日本語教育の現状と今後のこと
- ・研修会や教師交流に関する情報
- ・新しい書籍や論文のこと
- ・お互いの授業を見学すること

②連絡を取り合わない理由は何か

一方、Q12で「取り合っていたが、途切れた」「取り合っていない」と回答した人に、それぞれ理由を聞いてみた。その結果が表24、25である。共通しているのは、どちらも「時間がない」とした回答がもっとも多いことである。次に多いのは「必要がない」という理由である。「必要がない」の具体的な記述を見ると、問題解決ができていないから必要ない、興味がないという意見もあるが、中国の日本語教師に聞いても問題解決できないから、という声もある。

なお、上記理由の中で特筆すべきは、複数の人が「日本語教育から離れた」と回答したことである。両方合わせて12人もいる。自分または相手の勤

表24：Q12で「取り合っていたが、途切れた」とした回答の理由

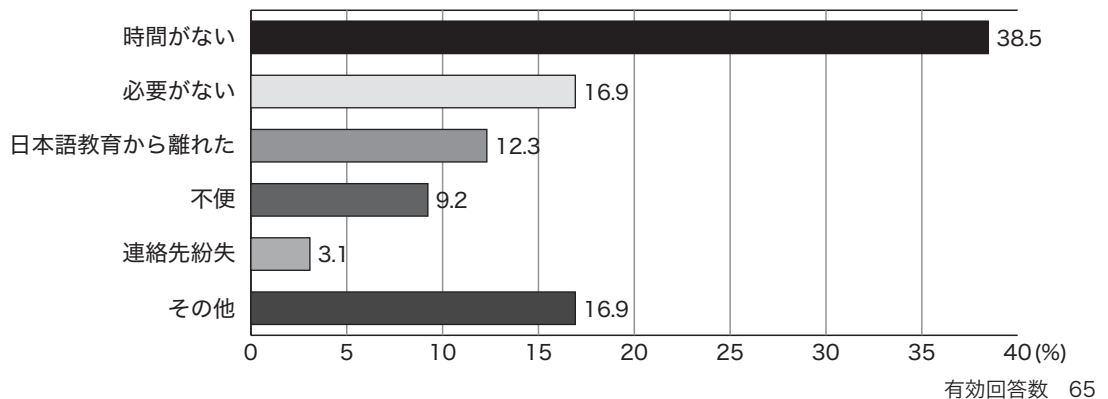
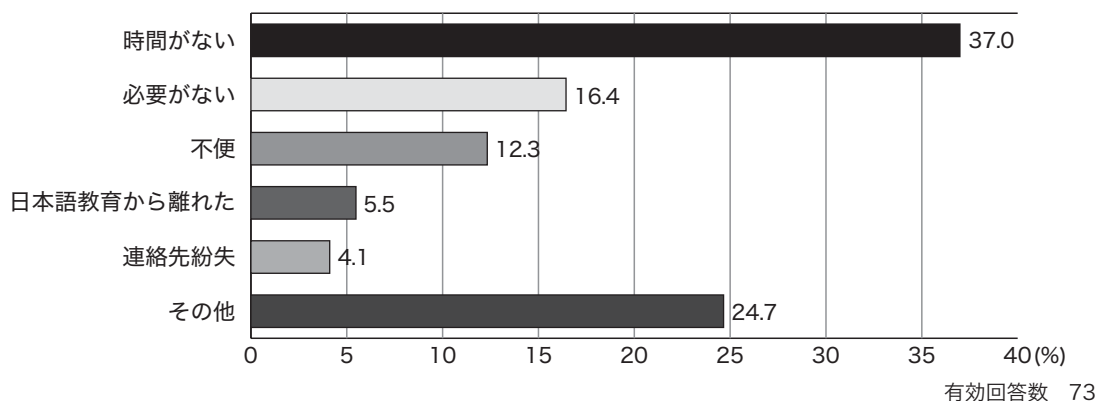


表25：Q12で「取り合っていない」とした回答の理由



務校における日本語科目の開設が中止になったため、他の教科の担当になったり、教壇から離れて他のポストに移ったりしている。中国の中等における日本語教育の現状を端的に表している。アンケートに答えていない人の中にも、止むを得ず日本語教育から離れてしまった人、教師という職業自体から離れた人もいる。

「必要がない」の詳細は次のとおり。

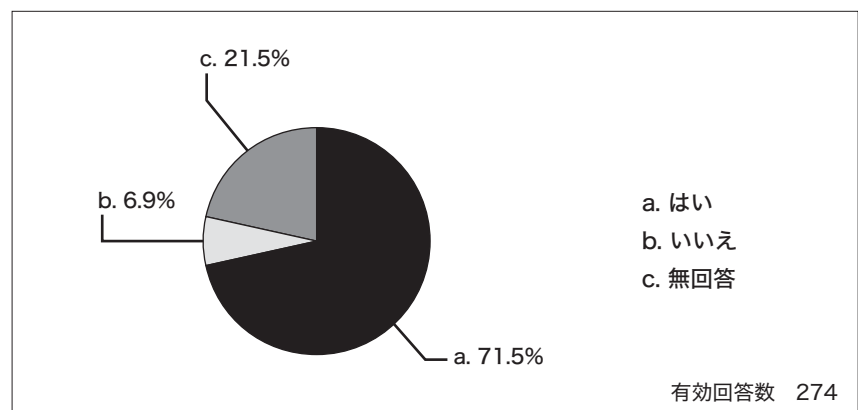
- ・他の人に聞こうと思わない。
- ・普段の仕事には必要ない、自分の関心は大学入試のための指導のみ。
- ・問題にぶつかったとき、中国の日本語教師に聞いても解決できないことが多い。
- ・学校間の交流がなく、わざわざ連絡を取るのは大変。
- ・毎日の仕事が忙しく、交流の必要性について考える時間もない。
- ・向こうから連絡が来ないので、こちらからも取ろうと思わない。
- ・日本語教師も資料も揃っていて、校内で問題が解決できる。
- ・本校に日本人教師がいて、他校の人と連絡をとる必要はない。

③今後、情報交換したいか

以上見てきたように、教師たちは研修会という場を共有したことがきっかけで、その後も連絡を取り合い、情報を交換していることから、研修会の目標の一つであった「ネットワークの構築」は一定の成果を上げたといえる。このネットワークを長く維持しつつ、活性化を図り、さらに広げていくためには、インターネットの活用が考えられる。一方、彼らがネットワークに求めているのは問題解決の拠りどころであるが、日本語のノンネイティブ教師同士では解決できない問題も多いという声があった。そこで日本人の日本語教育専門家を巻き込んだネットワークの構築のニーズと可能性について聞いた(Q14)。

その結果(表26)、7割近い人が「はい」と回答している。これには「参加

表26：Q14「電子メールを使って、中国の日本語教師と日本人の日本語教育専門家が情報を共有したり、問題を解決したり、意見を交換したりする場があれば、参加したいですか」



したいが、パソコンを持っていないためできない」という回答も若干含まれている。また、「いいえ」と回答した人の中にも「パソコンがないから参加しない」と回答した人が含まれ、環境さえ整えば「参加したい」と思う教師はもっと多くなることが考えられる。また、若い教師ほど意欲的であることも回答結果から分かっている。

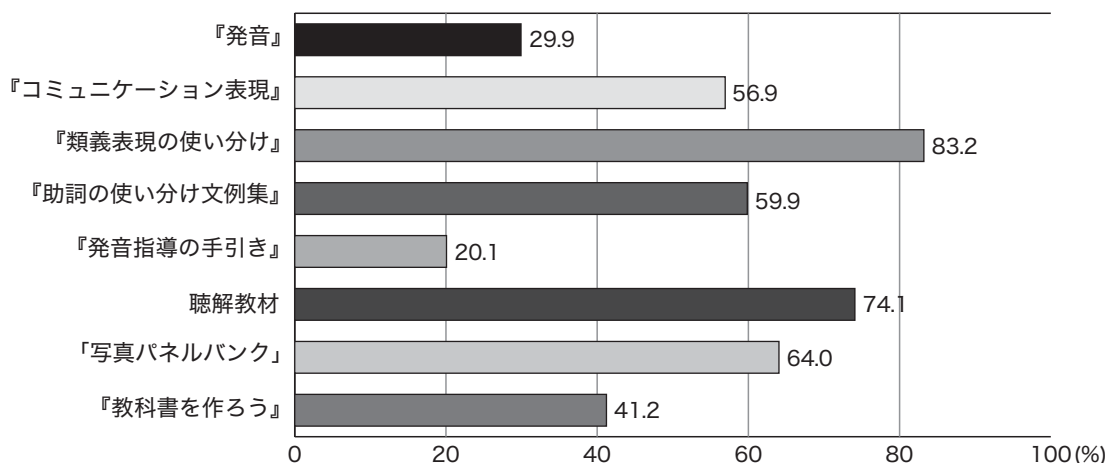
(3) 教材・資料を活用しているか：概ね活用

「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」①～⑤として2002年に刊行された『発音』『コミュニケーション表現』『類義表現の使い分け』『助詞の使い分け文例集』『発音指導の手引き』は、7回の研修会に参加した全研修生に寄贈した。聴解教材は、『楽しく聞こう』などであり、1996年から毎年研修生に寄贈した。また、『教科書を作ろう』は1999年から、「写真パネルバンク」は2000年から毎回、国際交流基金が研修生またはその所属校に寄贈した。

「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」は、研修会教材として開発したものであるが、教師の日ごろの参考書として機能するように、編集上さまざまな工夫を凝らした(36頁参照)。アンケートの回答結果(表27)を見ると、『類義表現の使い分け』を活用していると答えた人は8割を超え、また、6割近い人が『コミュニケーション表現』『助詞の使い分け文例集』を活用していると回答している。しかし、『発音』と『発音指導の手引き』の活用率が低いのは、この分野に対する現場教師の関心が低いことと、音声テープ付きでも自主学习が難しいということを物語っている。

一方、聴解教材では7割強、「写真パネルバンク」では6割強の人が活用していると回答し、こういった視聴覚教材に対するニーズの高さを窺うことができた。また、『教科書を作ろう』といった素材集も現場教師にとって有効であることが分かった。

表27：Q11「研修会でもらった教材、参考書の中で、研修会後も活用しているものは何ですか」



有効回答数 『発音』：274、『コミュニケーション表現』：274、『類義表現の使い分け』：274、『助詞の使い分け文例集』：274、『発音指導の手引き』：274、聴解教材：274、「写真パネルバンク」：178、『教科書を作ろう』：228

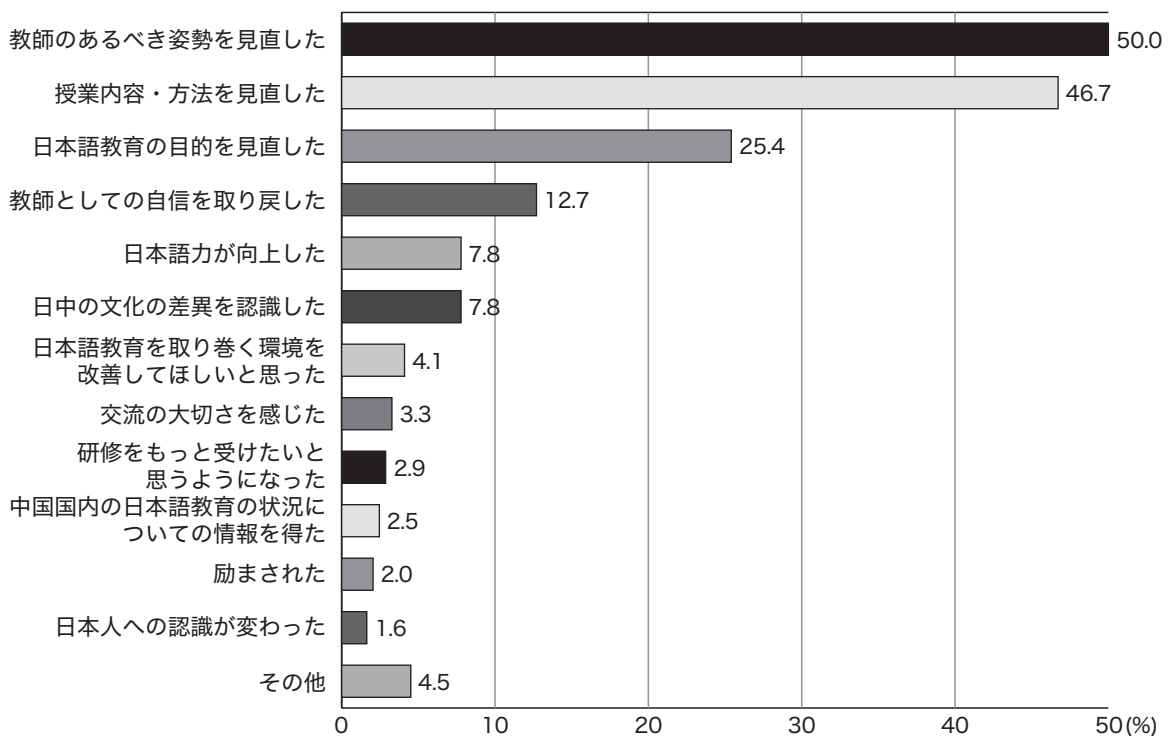
(4) 研修生の意識は変わったか：「教師の姿勢」と「授業内容・方法」の見直しが共に5割

Q13では、「研修会に参加したことで、意識面、価値観、教育観などで考えたり、発見したり、変わったりしたこと」について自由記述で回答してもらった。その回答を、「授業の内容や方法を変える必要があることが分かった」「日本語教育の目的は語学習得だけでないことに気づいた」「教師としての姿勢を学んだ」「日本語力が向上した・自信がついた」「教師としての誇りや価値を認識した」「励まされた」「日本人に対する認識が変わった」「交流の大切さが分かった」「日本の生活習慣や考え方および日中の考え方や価値観の差異に気づいた」「中国国内の日本語教育の状況を知った」「その他」に分類してまとめたのが表28である。

ここでも、「教師のあるべき姿勢」について認識を新たにしたという教師がもっとも多く、次に多いのは「授業内容・方法の見直し」につながったという回答で、「日本語教育の目的の見直し」につながったといった回答は3位になっている。「教師としての自信を取り戻し、存在価値を再確認した」とする回答の多かったことも注目すべき点である。

また、問いの趣旨からずれている回答も多くあったが、「日本語力が向上し、日本語力に自信がもてた」「日本文化と中国文化の差異が分かった」「中高校の日本語は危機的状況に陥っている、有効な手立てを考えてほしい」「日本に行って研修する機会を得たい」など、興味深い結果を得ることができた。

表28：Q13「研修会に参加したことで、意識面、価値観、教育観などで考えたり、発見したり、変わったりしたことはありますか」



有効回答数 244

研修会で学んだこと（アンケートQ13回答より）

●教師としての自分の姿勢について考えた

- 考え方はもちろん、人生観、教育観についても新しい認識をもちました。教育に従事してから十余年経ちますが、改めて生徒になって先生の授業を受け、昔に戻ったような気がしました。教師として生徒にどう接すべきか、生徒に授業に対する興味をもたせ、真面目に授業を受けさせるためにはどうすればいいのか、生徒の潜在能力、知力、人間性を育成するにはどうすればいいのか、改めて考えました。そして、改めて考えることによって、教師としての自信がさらに増しました。(2000、吉林省)
- 日本人の先生が無私の精神で、私たちのために尽くしてくださった姿から、人間が金銭のためにだけ生きているのではないこと、人間の情があることに気づきました。また、教えるということは、受験対策のためだけではなく、人間の育成のためです。日本語教育も単に日本語を教えることだけでなく、日本および日本人とその文化を生徒に理解してもらい、日本人と会話してもらうことを目的としていることに気づきました。(1999、黒龍江省)

●教師のやりがい認識した

- まじめに責任感をもって仕事をする日本人の先生の姿勢にとっても感動しました。私はこれからも教育にずっと携わる決意を固めました。同級生は続々と教育畑から離れていますが、私は動揺しません。可能ならば、最後の最後まで教師の仕事をしたと思っています。(1997、遼寧省)
- 教師になったことについて改めて考えてみました。以前、教師という仕事を真剣に考えたことがありませんでした。今は自分の仕事を大事にしようと思うようになりました。日本人の教育や授業に対する真摯な態度は、私も含めてみんなが学ばなければなりません。教師の一人ひとりが教育を大切な仕事として認識してこそ輝く未来につながると思います。(1999、吉林省)

●自分の力不足を認識。学び続けることが必要

- これまで小さな地方都市にいて、正式な日本語の訓練も受けたこともなければ、日本人に会ったこともありませんでした。研修会では、日本人の先生の授業に対する熱意、仕事と勉学に対する姿勢に接し、また半月にわたって勉強することによって、自分は教師として未熟であると痛感しました。外部から情報を取り入れ、これまでの閉鎖的な考え方を改めました。また、今年は大学で研修を受け、日本語教師としてふさわしい人間に成長したいと思っています。(2000、吉林省)
- 私たちは、日本語の教師として日本語らしい日本語を教えるように努力しなければならぬと強く思いました。そのために、日本の雑誌などを見て、日本の社会、文化、歴史などを学び、どんどん自分のレベルを高めることがとても重要だと思いました。(2000、黒龍江省)

●授業の内容と教え方を見直した

- 中国語による授業から日本語による授業に変えるとともに、文法教育から聴解・会話能力を育てる授業に変えました。文化を取り入れながら外国語を勉強することによって、人と人との交流を促進し、隔たりと誤解を解消できると気づき実践するようになりました。(1998、内蒙古自治区)
- 教師が主体となるのではなく、生徒を主体にして、生徒を導くようになりました。一方的な講義から生徒が自主的に学習するような指導へと変えました。生徒が問題意識をもって調べ、教師は最後にまとめるという方法をとるようにしています。その結果、生徒は勉強に対して意欲や積極性をもつようになり、主体的に勉強するようになりました。また、日本語の知識を伝えるだけでなく、日本の文化を紹介し、中国文化との関連を説明し、生徒の知識の幅を広めています。(1996、黒龍江省)

●語学習得だけが日本語教育の目的ではない

- 単に知識を伝えるのではなく、人間を育てることこそが教師として重要なことです。日本語教育において、生徒とどう向きあうべきか、生徒のコミュニケーション能力と素質をどう高めるべきか。研修会が終わった後、日本語教育について一生懸命考えています。(1997、内蒙古自治区)
- 以前、教師の優劣を評価する基準は生徒の進学成績であるという考え方をもっていました。しかし、研修会后、それだけではないと思うようになりました。生徒に知識を教えるだけでなく、知識の学び方についても教える必要があることが分かりました。(2000、黒龍江省)

●励まされた

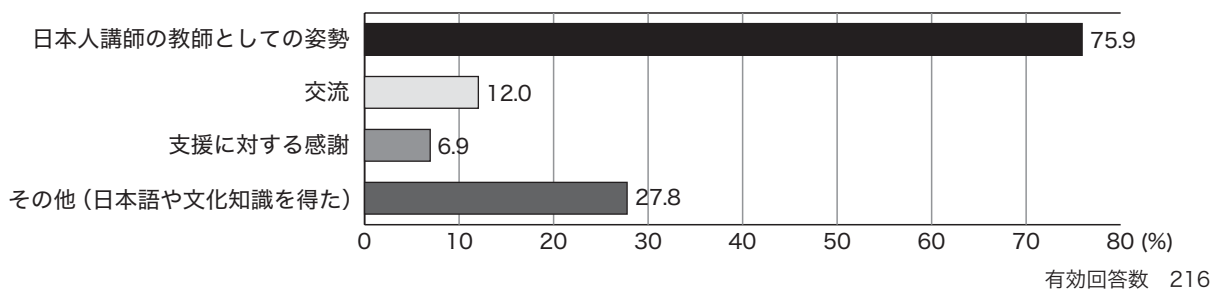
- 価値観についても、教育発展の見通しについても、新たな認識をもつようになりました。教育者として重責を背負っていることを強く感じるとともに、日本語の将来性に自信をもっています。他の学科よりうまくできていると思っています。また、日本語学習に対して学校や上級の指導部門もそれなりに重視するようになり、私たち末端の日本語教師は大いに励まされています。(1997、遼寧省)
- 日本語教師を務めるのは、とても骨が折れます。学校で黙々と、勤勉、誠実にやっけていても成績が認められないのは、日本語が少数科目だからです。でも、研修会后、自分はまだ幸運なほうだと思いました。私より苦労していて、教育活動の条件がもっと厳しいところにいる先生は少なくありません。しかし、彼らは一言も不平を漏らしたことはありません。とても感動しています。(2002、遼寧省)

(TJFで翻訳、編集しました)

(5) 研修生の心に残ったこと：7割が「日本人講師の姿勢」に感動

Q15で、「研修会で一番心に残っていることを聞かせてください」と問いかけた結果が表29である。回答者のうち、実に75.9%の人が「日本人講師のひたむきさに感動した」「日本人講師の真摯な態度から学んだ」と記述している。また、「初めて日本人と話した、交流した」という回答も多かった。下の記述にもあるように、「日本人と日本語で交流した」ことが、自信につながった研修生も多い。これらのことは、研修会の講師の人選や研修会に臨む講師の姿勢、教師研修における「人」と「人」の関わり、人間的な交流の大切さを指摘しているといえる。

表29：Q15「研修会で一番心に残っていることを聞かせてください」



研修生の声 (アンケート Q15回答より)

「一番印象に残ったのは、私と同じく外国語教育に携わっている多くの人と会えたことと日本人講師の授業を聞くことができたことです。交流を通じて、日本と中国との友情を感じました」

「日本人と交流したのは、今回が生まれて初めてです。日本人の先生による日本語の授業を聞き、一緒に水族館や大連タワービルを見学し、一緒にパーティをするなど、どれも印象深い体験でした。生涯忘れません」

「最後の夜の送別会で、みんなで歌ったり踊ったりして思い切り遊んだことが忘れられません」

「これほど多くの日本人講師や、中国国内の日本語教師と知り合えたことがいちばん印象に残っています」

「研修会中はとても暑かった。でも、日本人の先生たちは心を込めて、熱心に教えてくれました。日本語が下手な私たちと一緒に食事をし、話をしてくれました。その中から多くのことを学びました」

「研修会期中、私が風邪を引いて倒れたとき、親身になって助けてくれました。心から感謝しています。日本の友人は、私たちを誠心誠意助けてくれる友人だと思いました」

「いちばん印象深かったのは、最後の夜の日本人との交流でした。学校で日本人と交流する機会がないので、とても貴重な体験でした」

「研修会期中、急に寒くなって、ある先生は風邪を引いたにもかかわらず、授業を続けてくれました。辛くてもそのことを口に出したりしませんでした。とても感動しました。だから私も、日本語教師を職業として選んだ以上、ベストを尽くさなければ、教えてくださった先生方に報いることができません」

「初めて日本人と交流しました。日本人講師の授業を受けるというのは、はじめのうちは緊張し、慎重になりました。でも、2週間のふれあいを通じて、心配や緊張は無用だと分かりました。そして、今では、知らず知らずのうちに日本人講師と同じように、やる気満々になり、生き生きと授業に臨んでいます」

「いちばん印象に残ったのは、日本人と日本語で交流できたことです。ふだん日本語を勉強できる条件が私たちにはほとんどなかったからです」

「多くの日本人と交流しているうちに、日本人に対してもっていた反感が変わりました」

「研修会で初めて日本人に会い、初めて言葉を交わしました。はじめのうちは、自分の日本語が通じるかどうか心配でした。自信がないので、なかなか口を開けませんでした。でも、1週間経つと、すべての不安が消え、かなり自信が湧いてきました」

(TJFで翻訳、編集しました)